

6月10日(土) 6月例会第2部として青木怜子氏(元大学女性協会会長)による講演『国連は何故女性問題を扱うようになったのか～国際会議の一環としての国連をみる一大国の権益とエゴからの脱却～』が開催されました。講演要旨を記載します。

国連の国際会議では、二国間協議と多数国間協議が行われるが、1684年のWestphalia条約から1945年の国際連合(UN)登場までの系譜を歴史的に還元してから、国際連合の使命と国連憲章について触れられた。1960年代以降の国連は「社会開発」をテーマとして旧植民地の経済開発を優先していたが、徐々に開発途上国の課題から視野を世界的に広げ、その課題の一つとして「女性の問題」が含まれるようになった。

1975年を「国際婦人年」と位置づけ、続く10年間に三つの国際会議が、メキシコ(75)、コペンハーゲン(80)、ナイロビ(85)で開催された。これらの国際会議は1995年の「北京会議」へつづく道のりでもあった。「北京会議」での課題を踏まえて「北京行動綱領」が作成された。そして、CSW国連婦人の地位委員会が設立された。CSWの優先課題は「変化する仕事の世界の中での女性の経済的エンパワーメント」であったが、今国連は持続可能な開発目標を達成することを目標にして、「経済におけるジェンダー平等の達成とあらゆる女性・女児のエンパワーメント」を謳っている。今年3月に開催されたCSW60とCSW61には国連日本政府代表部など日本からの参加が多くあった。

最後に、青木怜子氏は「世界を繋ぐ女性の力、世界が繋ぐ女性の力」を結びの言葉とされた。